
帰去来

シン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帰去来

【Zコード】

Z5935Z

【作者名】

シン

【あらすじ】

ハロウィンの日、学生時代から嫌いだつた厭な男、ビルから『失恋した』という電話がかかって來た。

彼は酒を煽り、時には涙を零しながら、その失恋話を延々と続ける。カボチャや魔女が舞めき合い、お菓子が山と積まれる部屋で。ハロウィンの今日、ビルはその子と逢う約束をしていたのだ。それなのに、その子は来なかつた。

だけどぼくは、ビルの失恋話を笑う気には、なれなかつた。
なぜなら……。

学生時代から、厭な奴だつた。

愛称、ビルは、二ユー・イングランド地方の名家の御曹司で、名門私立高校から東部名門ハーバード大学の一枚に進学した正真正銘のヤツピード、地域社会で敬われていた彼は、自らがこの国を動かしている、とさえ思つていたのだ。

WASP (White Anglo Saxon Protestant) と呼ばれる彼のような一部の白人が全てそうだ、とう訳ではないが、好んで付き合いたい、と思える人種では、なかつた。

傲慢で、厭味で、貧乏人など見下し、そのくせ、施しだけはきつちりと与える。

教会にも通つている。

そういう名家の御曹司としてのスタイルが、彼には生まれながらに染み付いていたのだ。

アメリカの多くの地方では、彼のような名家の御曹司が実力者として慕われるが、この二ユーヨークではそうは行かない。ここでは、本物の実力者でなければ、相手にされないので。

だが、まずいことに、アイビー・リーグで四年間の学部を終了し、大学院で修士号まで得た彼は、その本物の実力さえ持ち合わせていた。

二ユーヨークで成功したのだ。

それでも、彼を慕う者はいなかつた。

結果、彼は、故郷での人々に敬われる生活を望み、地元から自分の言つことを利くイエス・マンを呼び集めた。その取り巻きたちを側に置き、我が物顔で振る舞い始めたのだ。

今では、彼のことを“ビル”と親しみを込めて呼ぶ人間は、その取り巻きたちだけになつてゐる。他の者は、彼の正式名、ウイリア

ムで呼び　いや、そのファースト・ネームで呼ばれている分には、まだいい。厭味のセンスを持つ人間なら、彼のラスト・ネームにサ一の称号をつけて呼ぶだろう。もちろん、彼がその称号に相応しい人間だ、という意味ではなく、全く別の意味で。

ぼくは、彼をビルと呼ぶ取り巻きの一人だった。

従兄弟である、といえば、まだ体裁がいいが、実際には、大学へ行くために彼の父親に資金を援助してもらった、という、一歩下がらざるを得ない立場である。

ビルもぼくも、互いに今年、三十歳になる。

そんな折り、ビルから一本の電話がかかって来た。　いや、その話をする前に、彼のここ一月間の様子を付け加えて置かなければならぬだろ。

ビルは、この一月近くの間、屋敷に取り巻きたちを呼び付けることもなく、仕事が終わればすぐにイースト・サイドに構える豪勢な屋敷に戻り、どこにも出歩くことはなかつたのだ。

そして、十月三十一日の今日、彼は浴びるほどに酒を飲み、強かに酔つた口調で、ぼくに電話をかけて来た。

「失恋したんだ……。すぐに来てくれないか」

行きたくなど、なかつた。ハロウィンの今日、ぼくは近所の子供たちにお菓子をあげることを楽しみにしていたのだ。いや、その後、子供たちに冷やかされながら、彼女と食事に行くことを。だが、従兄弟ということもあり、彼の父親に恩もあり、加えて、イエスとしか言えない立場の人間であったため、ぼくは渋々、彼の屋敷へと足を運んだ。

失恋していい気味だ、と思うよりも、彼に恋人がいた、というこの方が驚きだつた。彼のような傲慢な人間に、どこの誰が付き合つていたのだ、と思つたのだ。

だが、別にそれを聞きたいとは思つていなかつた。少なくとも、今日は。

ぼくがビルの屋敷に着いたのは、それから三〇分後のことだつた。この狭いマンハッタンで、庭までついている立派な屋敷である。ビルは、庭に面した大きな窓のある部屋の片隅で、蹲うquatるようり、ウイスキーを煽つていた。

部屋には、甘い匂いが充満している。香水、とかそんな気の利いたものの匂いではない。キャンディやチョコレート、クッキー、ケーキ……そんなお菓子の群れの、甘つたるい匂いである。

これから一〇〇人の子供がお菓子をねだりに来るのか、と思えるほどのお菓子の山は、そこら中に飾りつけられたカボチャや魔女の装飾と共に、賑やかな一日を演出している。

だが、その広い部屋の片隅で酒を燻るジルの姿は、空寂、寂寥、としか言えないものであつただろう。

ぼくはとにかく窓へと向かい、酔いそうになるほどのかきから逃れるために、大きく窓を開け放つた。何しろ、甘ったるいお菓子の匂いと、ビルの煽る酒の匂いがごちゃまぜになつてゐるのだから、気分が悪いこと、この上ない。

庭には、いつもガレージに入れてあるはずの、黒塗りの高級車が
出してあつた。誰かに磨かせておいたのか、いつも以上にピカピカ
である。きっと、恋人と出掛けるために用意していたのだろう。
ぼくは、ビルの前に身を屈め、時計を気にする素振りを見せなが
ら、来たことだけを彼に告げた。

「可愛い子だつたんだ」

ビルは言った。

酒のせいだけでなく、目が赤い。

「庭に車が出してあるだつう? おれは今日、その車にあの子を乗せてやるつもりだつたんだ」

そう言つて、ビルは、グイ、っとウイスキーを飲み干し、また、グラスの中へと注ぎながら、取り憑かれたように喋り始めた。

「おれは小さい頃から恵まれていて、一流の生活、一流の教育、一流の身のこなし……何でも不自由なく持つていた。あの車もそうだ。九月の始めに買い替えたばかりなんだよ。 知つてるだろ? 前の車も悪くなかったが、今の車の方がずっと気に入っている。その車に、汚い手で触ろうとしているガキがいたんだ。まだ買い替えたばかりの頃だよ。おれは、仕事の付き合いもあって、鑑みたくもない個展に連れ出されていた。それでも、買つたばかりのあの車に乗つて出掛けることができて、ちょっと気分が良くなつていたんだ。だが、その気分の良さも、その薄汚いガキのせいで吹き飛んだ。おれはすぐに、

『何をしているんだつ!』

つて、そのガキを怒鳴りつけたよ。まだ小さい子供なんだ。近くで見ると、思つていたよりもずっと小さくて、何もそんなデカイ声で怒鳴ることはなかつたな、つて、後悔したんだ。だけど、前にも車に傷をつけられたことがあつたから、おれも甘い顔はしなくて。覚えているだろ? 白のベンツに乗つていた時だ

「ああ」

ぼくが応えると、ビルはまたウイスキーを、グイ、っと煽り、息苦ししくに噎せ返つた。

多分、ぼくが腕の時計を垣間見たことにも気づいていなかつただ

る。今。

「おれは、そのガキもてつきり車にイタズラをしに来たんだと思つて、優しい言葉で追い払つこともせず、思いつきりきつい視線で睨みつけてやつたんだ。小さな子供といつても、この街じゃあ、そんな子供がマリファナやコカインをやつしたことなんて珍しくもないからな。 だけど、そのガキは、おれが睨みつけるのを見ても逃げもせず、へへへ、と頭を搔いて笑つたんだ。こいつは脳みそが足りないんじやないか、つて思つたよ。おれが子供の頃なんか、大人に上から睨みつけられたら、怖くなつて走つて逃げたさ。最近のガキは、そんなことじや逃げないんだ。それどころか、

『このくるま、ぴかぴかだね。すごくきれいだね』

つて、でつかい目をキラキラさせて言つんだ。ハツ、とするほどに可愛い顔をしてさ。アクアマリン、つてあるだろ？ その宝石みたいにきれいなブルーの瞳で、髪は眩しいくらいの赤毛で。ああ、この子はきっと、大きくなつたら金髪になるんだろうな、つて思つたよ』

そこまで言つて、ビルは思つ出すよつに瞳を閉じ、じばらく自分の時間に浸つっていた。

ぼくは、といえば、帰つてしまつ訳にも行かず、仕方なく冷蔵庫から氷を取り出し、水割りを作つて飲み始めた。話がすぐには終わりそうにない、と諦めたのだ。

「そのガキはさア……」

と、ビルがまた話を始める。

「そのガキは、とんでもない馬鹿なんだよ。人に怒られてる、つてことが解つていらないんだ。普通なら、車の持ち主が戻つて来た地点で、ああ、自分はもうこの車から離れなくちゃならないんだな、つて判断するだろ？ だけど、そのガキは離れないんだ。汚い手でベタベタ触ろうものなら、また怒鳴りつけて追い払つてやるうと思つたけど、触りもせずに、ただ眺めているだけなんだ。 で、おれも無下に追い払つことも出来なくて、さつき怒鳴りつけたことも、何だか酷く悪いことをしたような気がして いや、本当は悪いなんてこれっぽっちも思つていなかつたかも知れないけど、とにかく、おれが悪者になるのは厭だつたから、

『車が好きなのか？』

つて、聞きたくもないことを訊いてやつたんだよ。 そうしたら、とびきりの笑顔でうなずくんだ。でも、その後すぐに、照れるようにはにかんで、本当は、こんな凄い車を見るのは初めてで、珍しくて見ていた、つて言つんだ。そんなこと言われなくとも、おれには最初から解つていたさ。薄汚れた、見窄らしい浮浪児みみたいなガキが、黒塗りの高級車になんか乗つたことがあるはずないんだからさ。もちろん、近くで見たことだつてないだろう。おれは心の底から、そのガキを馬鹿にしたよ。バワリーにいる貧困層の白人の子だらう、と。このまま大きくなつたつて、学校にも行かず、ドラッグに溺れて、ギャングか麻薬シャンキー中毒者になるだけの子供なんだ。人間のクズだよ

せんせーを捨てるみつて言つておきながら、ビルは、じぶしが白くなる
まどこ、きつく指を結んでいた。

いつになつたら本題に入るのだらう、と、ぼくは時計を気にしていたが、ビルはそんなことなどお構いなしで、話を続ける。

「おれは、一向に車の側から離れないガキに、いい加減、腹が立て来てさ。車のことを褒めてもらつた、つていつても、そんなガキに褒められたつて嬉しくもないだらう？ だから、

『年はいくつなんだ？ 家に帰らなきや両親が心配するだらう』って訊いてやつたんだ。もちろん、心配してくれるような良い両親がいるなんて思つていなかつたさ。心えられないことを訊いてやれば、そのガキもきっと帰るだらう、と思つたんだ。そうしたら、そのガキも寂しそうな顔をして、それでも一応、笑つて、やつと車の側から立ち上がつたんだ。その時、初めて靴が見えたよ。サイズの合つていらない汚い靴なんだ。きっとどこかで拾つて来た靴なんだよ。だからおれは、そのガキはおれに金をねだるつもりで、車の側で待つていたんだ、つて思つたんだ。

『ギブ・ミー・ニッケル（5¢（ニッケル）ちょうどだい）』 つてさ。よくいるだろ？ でも、そのガキは金をねだらずに、

『五つ』

とだけ応えたんだ。だけど、立ててる指は四本で。どうやら、この間、五つになつたばかりらしくて、指の本数を間違えているんだ。そのガキはまた頭を搔いて、恥ずかしそうに笑つて、すぐに五本目の指を立てたよ。本当に馬鹿なガキなんだ。数も口クに数えられないとんだぜ。だから、おれは言つてやつたよ。

『おまえがこの車を買うには、少なくとも後一万年はかかるな』つて 。普通なら、小さいガキにそんなことなんか言わないだろ？ 言つても、冗談めかして言つただ。 でも、おれは言つたよ。それでも言わなければ解らない阿呆だったんだ

このままいつまで付き合わされるんだらう、と思ひながら、ぼく

はもう時計を見ることもせず、彼女との約束の時間まで、ビルの話に付き合ひつゝにじした。

「おれがそう言つたら、そのガキはどうしたと思つ? また照れる
ように笑つたんだ。人の厭味なんて、全く堪えていないんだよ。だ
から、おれもそれ以上付き合つてる気もしなくて、車に乗ることに
したんだ。でも、運転席のドアのところにそのガキがいてさ。」

『危ないから退いてる』

つて言つて、そのガキを脇へ下がらせたんだ。ちょっと押して下
がらせただけなんだぜ。 いや、面倒臭くて、少し力が入つてい
たかも知れないけど。 そのガキが、コテン、と転んだんだ。呆
氣ないほど、簡単に。 押した時に判つたんだけど、惨めなくら
いに瘦せてるんだよ。 口クなものを食べていないんだ。悪いことを
したな、つて思つたよ。 そのガキが自分から車の側を離れるまで待
つてやれば良かつた、つて。 そう思つたけど、それ以上に、そん
な小さい子供を突き飛ばしたことに焦つて 他人の目を気にして
いたんだ。 そのガキが泣き出さなくて良かつた、とか、すぐ近くに
人がいなくて良かつた、とか思つて、ホッとしたんだ。 それで、人
が来ない内に、そのガキに手を貸して起こしてやつて。 そうしたら、
『ころんじやつた』

つて、まるで自分の失敗みたいに、恥ずかしそうに言つんだ。お
れが突き飛ばしたせいで転んだ、つていうのにさ。 おれ……自分が
恥ずかしかつたよ。だから、

『家の人気が心配しないのなら、何か食べてから帰るかい?』

つて訊いてやつたんだ。 いや、それもいつも通りの貧困者へ
の施しのつもりだったかも知れない。 それに、そのガキは気づいて
いなかつたけど、ヒジから血が出ていたんだ。 転んだ時に怪我をし
たんだよ。でも、そのガキは泣いていなくてさ。 痛いとも言わない
んだ。 おれは心の中で、こいつは正真正銘の馬鹿だから神経も通つ
てないんだな、つて思つたけど、そのガキを不憫に思つているおれ

もいて、そのガキが、コクン、とうなずいたから、何か食べさせてやることにしたんだ。でも、その汚いガキを連れてレストランに入る気がしなくてさ。ホットドック・スタンドで、ホットドックとジュースを買ってやつたんだ。もちろん、ヒジの傷もハンカチを濡らしてきれいにしてやつた。ドリッグ・ストアで絆創膏を買って、その傷口に貼つてやつたんだ。

そのガキが家に帰つて、おれに怪我をさせられた、って言つたら厭だろ？ 本当は、そんなことを親に言い付けるようなガキじゃないんだけど、おれは貧乏人はみんな小賢しいと思つていたからさ。そいつが、そんなことを考える脳のない馬鹿なガキでも、親に言い付けられないように、って文句のつけようがないくらい親切にしてやつたんだ。そして……その子がホットドックを食べている間において帰つた。もちろん、

『もう帰るから、後は一人で大丈夫だね？』

と訊いてやつたさ。そのガキも、

『うん』

とうなずいた。だから家に帰つたんだ。それで

そこまで言つて、ビルは涙を堪えるように、唇を結んだ。

ぼくにも、彼が泣くまいとしていることが判つたので、少し一人にしてやろう、と思って、冷蔵庫に氷を取りに行つた。

カラーン、カラーン、と氷を入れる音を立てるごと、背中の方から、ズズつ、と鼻を啜り上げる音が聞こえて来た。

ビルの方もストレートでは体に悪いだろう、と思つたけど、無理に水割りに変えさせようとは思わなかつた。今の彼には酒が必要なのだ。 といつても、肝心の失恋の話は、まだ聞いていないけど。

「次の日、またそのガキに逢つたんだよ」

ぼくが戻ると、ビルは赤い目を隠すようにしながら、そう言つた。
「おれの家の前で、キヨロキヨロしてるんだ。マズイことをしたな、つて思つたよ。昨日親切にしてやつたから、味をしめてまたタカリに来たんだ、と思つてさ。早くどこかへ行つてくれないかな、つて思いながら、ブラインドの隙間から覗いていたんだ。でも、一向に帰る様子がなくてさ。三時間も同じ場所を行つたり来たりしているんだ。時々、門の前で立ち止まつては、自分の手のひらを眺めたりしてさ」

「手のひら？」

ぼくは、初めてビルの言葉に問い合わせ返した。

「ああ。 いや、本当は手のひらじゃないんだ。その小さい手に何かをもつてゐるんだよ。後で判つたんだけど、それはおれの免許証でさ。それを届けに来てくれたんだ。それなのにおれは、そんな小さい子を三時間も外に放つておいて、早くいなくなつて欲しい、つてブラインドの隙から眺めていたんだ。やつと家に入れてやつたのは、あんまり腹が立つて、追い払つてやううつと思つた時さ。ズンズンと足を踏み鳴らして、思いつきり目を吊り上げて外に出て行つたんだ。 そうしたら、そのガキは嬉しそうにおれを見上げて、

『これ

つて、その免許証を差し出して言ったんだ。あの車を運転するのに必要なものだ、って解ってるんだよ。いや、ホットドック・スタンドのおやじからそう聞いた、と言っていた。あのガキは字が読めないんだよ。まあ、まだ五つだからな。それで、そのおやじに読んでもらって、あの脳みその足りない馬鹿な頭で、おれの家の住所を一生懸命、覚えたんだ。きっと、あいつの頭だから、何回も繰り返し聞かなきや、こここの住所なんか覚えられなかつたはずなんだ。字が読めないんだから、頭で覚えるしかないだろ？ あのガキも偉いが、あのガキに繰り返し住所を読んでやつたホットドック・スタンドのおやじも偉いよ。 そう思うだろ？ とにかくおれは、免許証を受け取つて、そのままガキを帰す訳にも行かなくて、家に入れてやつたんだ。

『『ジュースでも飲むか?』』

つてな。何しろ、三時間も待っていたんだからな。あのガキも一
言声をかければいいのに、黙つてうろついてるものだから、おれだ
つて何の用があるのか判らなかつたんだ。でも、考えてみれば、門
についているインター ホンは、あの子の身長じや届かないんだよ。
ドアをノックして声をかけるには、門をくぐらなきやいけない。あ
の子はずつと、それで悩んでいたんだ。あのちつこい脳みそで
おれは何だかその子のことが無償に愛らしくなつて、ジュースだけ
じゃなく、クッキー や チョコレートも出してやつたんだ。来客用の
高いやつだよ。あの子は瞬きすら忘れてそれを見ていたさ。お
れがお菓子を出してやるまでの間も、キヨロキヨロと部屋の中を見
回して、

『『すごいおうちだね。これ、ぜんぶ、ひとつのおうちなの?』』

つて、何度も訊くんだ。それから、自分の汚い服と見比べて、恥
ずかしそうにうつむいてさ。解つてるんだよ。自分が貧乏人で、こ
んな家には相応しくない人間なんだってことが。あの子は、おれが
思つてるほど、馬鹿な子供じやなかつたんだ。身分違いを思い知ら
された上に、きれいなグラスに入つたジュースや、ピカピカの皿に
並べられた高級なクッキー や チョコレートが出て來たものだから、
どうしていいのか解らなくなつてたんだよ。 その様子を見なが
ら、おれが何を考えていたか解るか? おれは貧乏人の子に生まれ
なくて良かつた、つて考えてたんだよ。だつて、そうだろ? 他人
の家に招かれて、マナーも知らないんじや、恥をかくだけだ。だけ
ど、貧乏人の子に生まれたら、こんな家に招待される機会もないん
だよな。何が恥なのかも、きっと一生知らないままなんだ。その子
も、目の前に並ぶジュースやお菓子を見て、これ食べてもいいのか
な、つて顔で、悩んでるんだ。おれとお菓子を交互に見つめてさ。

おれが一つつなぎしてやると、その子は両手でお菓子をつかんで食べ始めたよ。ジュースは手を使わないんだ。ストローが差してあつたからさ。クッキーを食べては、そのストローのところまで口を持って行って、吸い付くんだ。口の中のお菓子をまだ全部飲み込んでないのに、両手にはもう次の菓子を持っている。あんまり浅ましくて、みつともなくて、惨めで、汚くて、下品で……いつもなら眉を顰めるんだけど、おれ……その子が可哀想で、可哀想で……顔を背けることしか出来なかつたんだ。可愛い子なんだよ。素直で、優しくて……。それなのに、何でそんな汚い格好をして、おなかを空かせてなきやならないんだ、つて……。おれ、その子にもつと何かをしてやりたくなつて……」

「……ぼくもビルから視線を逸らすことになつた。ビルの目から、ぽろぽろと大きな涙が零れたのだ。

もちろん、ビルが、その子のことを、ガキと呼ばなくなつたことにも気づいていた。

「おれ……昨日、その子に貼つてやつた絆創膏が汚れているのを見て、新しいのに替えてやらなきや、つて思つたんだ。信じられるか？ その子の母親だつて、その絆創膏には気づいたはずなんだ。それなのに、絆創膏を替えてやつてもいらないんだよ。普通、風呂に入つたら駄目になるだろ？ 風呂に入れてもらつていないんだよ。だからおれは、その子を風呂に入れてやるうと思つて、その子がお菓子を食べ終わるのを待つて、そう言つたんだ。途中でお菓子を取り上げたら可哀想だろ？ だから、最後まで食べ終わるのを待つて。そうしたら、その子、何て言つたと思つ？」

『「ごめんな。きたない？」』

つて、恥ずかしそうに、おれに訊くんだ。 おれはびくつ思えてやれば良かつたんだ？ 何て言つてやれば良かつたんだ？ おれが苦笑いをすると、その子は自分で服を脱ぎ始めたよ。不器用でさ。ボタンもうまく外せなきや、袖もうまく抜けないんだ。 でも、そんなことは関係ない。 その子は、おれに憫れみを受けている、つて知りながら、それを屈辱とも思わず、汚い格好でいちゃいけない、と思って、素直に風呂に入ると言つたんだ。 強い子なんだよ……。 おれは、服を脱ぐのを手伝つてやろうと思つたけど、ついに最後まで手が出せなかつた。 それが悔しくて、情けなくて……。 だから、風呂では必ず、体を洗うのを手伝つてやろう、つて決めて、汚れた服を洗濯機に放り込んで、その子を風呂に入れてやつたんだ。 その子は、バス・ルームでも珍しそうにキヨロキヨロとしていたよ。 これが風呂だとは信じられない、つて顔でさ。 おれは優越感を感じたよ。 その子が珍しそうに辺りを見回し、おれに何かを言つ度に、優越感を感じていたんだ。 そんな小さい子供を相手に……。 だから、おれ、その自分の心をごまかすために、その子に話しかけてやつた。 おれは優しい善人なんだ、つて顔でさ。

『家では、いつもお母さんと一緒にに入るのかい？』

つて。そうしたらその子は困ったように曖昧に笑つて、ただ首を横に振つたよ。家族のことは話したがらないんだ。おれとは大違ひだよ。おれは小さい頃から両親が自慢で、家柄が自慢で、その話をするのが嫌だ、って思つたことなんか一度もなかつた。でも、その子は母親を嫌つていた訳じゃないんだ。母親をかばつていたんだ。おれに悪口を言われないように。小さくとも、男は男なんだよな。ちゃんと女をかばうんだ……』

一呼吸おき、ビルはウイスキーを喉に流し込んだ。その手の中に、涙を拭いたハンカチがある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5935z/>

帰去来

2011年12月25日16時46分発行